

初期宗教心の統計的研究

——女子中学生を中心に神に対する認知・態度——

荒井貞雄

- 序
- 一、攻究問題
- 二、研究方法
時期、方法、被験者
- 三、整理方法
- 四、結果と考察
- 五、要約
- 参考文献

序

必要を充し、喜びを与える存在としての母親は、嬰兒の精神生活の中に極めて重要にして且つ決定的な役割を

初期宗教心の統計的研究

果して居る。嬰兒は母親に笑いを送る、甘える、すねる、叱られては嫌い、恐れる。又、好く、然し嬰兒は母親なくしては生きることが出来ない不可分の関係にある。幼児期、少年期、青年期に及ぶにしたがつて母親を愛する、信頼する、尊敬する、時には礼拝する。これが、とりもなおさず、人間の宗教心である。すくなくとも宗教的素質の現れである。若し宗教生活とは人と絶対価値者との関係・交渉にふれることであるとすれば、人は先天的に宗教的素質に充ちて居る。人は或いは長じて無神論を称え、無宗教を誇張しようとも、実はその心底には上述の宗教的素質が潜在していると考えられるのである。宗教の基本的本能として、マクトウガルは、⁽¹⁾ 嘆賞、畏怖、崇敬の三つをあげて居るが、これは、言葉をかえるならば素質である。この本能・素質のみをみるならば、今日社会で宗教と云つて居るようなものとは距離のあることに気付くであろう。プラットも⁽²⁾ 云うように、この先天的宗教素質は後天的要素によつて発達した宗教に成長するのである。人間の他の諸々の先天的素質が環境の刺戟を受け、反復作用を通じて高度に発達すると同じように、宗教的素質も、宗教的環境に接し、無意識状態から意識生活に発達し、高度な宗教的態度に成長するものであると云うことは、既に、今日の実験心理学者間で一致した原理である。例えば、発声は本能であり先天性素質であるけれども、社会的環境に影響せられて言語即ち日本語とか英語とかをよくするように発達するのである。特に、宗教的発達の如く各方面と関連した複雑な内容をもつ本能・素質には、之の成長期に則した教材と方法が、必要になつて来る。特に、急速に成長発達する青少年期には、之の宗教的発達も、この時期を最大とするものだけに、特別の注意が必要とされる所以である。プラットは、彼の名著「宗教意識」の中で、児童が宗教意識を得る原因として、次の三つをあげて居る。⁽³⁾ 即ち

- (1) 年長者の行為より受くる間接の影響
- (2) 宗教的知識、問題、現象等の直接教授
- (3) 児童の精神の自然的発達

この三つの原因は決して分離して機能するものではない。然し、幼年期、少年期、青年期とその各々の成長期の特徴をあらわして居るようにも考えられる。

スターバック以来、宗教生活即ち信仰生活に正式に入る決心をする時期についての数多くの研究がある。彼によると入信現象は一〇才から二五才迄の間になる明白なる青少年期の特徴であり、男子は一六・三才、女子は一三・七才が平均入信年令と報告して居る。⁽⁴⁾ 今田 恵氏の最近の報告によれば、わが国における基督教信徒五四六名中、男子は一八才、女子は一九才が入信平均年令とすることである。かくの如く、入信の年令については、英米では一六、七才、わが国では一八才である。然し外国に於いても一八才と報告して居るものもある。⁽⁵⁾ 又、わが国においても一六、七才と報告して居るものもある。⁽⁷⁾

本稿においては、入信以前の宗教心の発揚、原因、態度等について統計的研究の結果を報告しようと試みたのである。この研究の特異性は、(一)従来の研究が入信者のみを対象としたのに対し、一般人即ち公立学校の女子学生全員を対象としたこと、(二)従つて、既に入信した者、将来入信するだろう者、又、入信はしない者も含まれて居る。このことは、言葉をかえれば、現代日本の一般青少年の宗教心の実体の究明と云うこと、(三)女子青少年に限つて居ること、(四)宗教的情操を建学の土台とする学園と公立学校の学生との比較を試みたこと云う四点にある。

一、攻 究 問 題

次の各項を究明し、その結果を学年、校種別に比較しようとする。

- 1、神仏について認識を得た経路
- 2、その場所
- 3、その時の年令
- 4、神仏と本当に交渉のあつた体験の有無
- 5、その理由、動機
- 6、その時の年令

二、研 究 方 法

1、時 期

調査は昭和三二年九月より一〇月に亘つて、当時の相愛女子短大第二学年の教育実習生が、筆者の計画のもとに、実習協力校の指導教官の指揮により、分担実施した。

2、七項に答える質問法で、用いた用紙は 26cm×36cm の用紙に次の如く印刷してある。内容は信仰の対象である神仏を認識した経路及び神仏と本心何等かの交渉のあつた体験の記述である。

(この研究は「現代教師像の研究」(本誌第五卷第一号報告)と同時に行われた。)

別に説定した基準に基いて得た数値により、その相関を算出した処、 $r=0.88$ となり、之の信頼性の極めて高

相愛教育研究資料 6 (各項毎に説明し、質問に答)
えーせいにはじめる。5分)

1. 学校名 _____ 2. 学年学級 _____ 3. 男女 (どちらかを消す)
4. 記入月日 月 日 5. 名まえ(記入は自由) _____

A. あなたは神さま (又は仏さま) について、はじめ誰に教わつたか又は
どうして知つたかを思い出してごらんさい。
1. 教わつた人 _____ そのほかの方法で _____ 思い出せない _____ (✓を
する)
2. どこで _____ 思い出せない _____ (✓をする)
3. 何才の時 _____ 才 思い出せない _____ (✓をする)

B. あなたは神さま (又は仏さま) にむかつて本心から話したり願つたり
又神さまのことを考えたりしたことがありますか。
4. ある }
5. ない } どちらかを○でかこむ
6. そのわけ、又はその時のあなたの気持 _____
7. それは何才の時 _____ 才 思い出せない _____ (✓をする)

第1表 被 験 者 (女子)

学校種・学年別	学校数	被験者数	回答率 (%)	記名率 (%)
公立小学6年生	1	161	75	89
公立中学2年生	2	1181	81	67
私立中学2年生	1	130	100	97
公立高校2年生	3	563	95	60
私立高校2年生	1	180	100	86
計	8	2215	90.2	79.8

4、予備調査と資料の信頼性

教師像研究資料蒐集の際、筆者自身S中学の二年五組

の自然学級の個別面接の結果と集団調査の結果について

3、被験者は、小学校六年生は尼崎市立、中学校、高等学校は大阪市立及相愛中学校、高等学校の八校である。その内訳は第一表に示す通りである。回答率及び記名率を見ても、調査は極めて普通に行われたと思われる。記名で質問に答えないものもあつた。各項目とも記入してないものは無回答として取り扱つた。

い事を発見した。同時刻に同じ対象から得た本稿資料も、その信頼性は同じと見て差し支えないと考えられる。

三、整理方法

- 1、公立小、中、高校の女子だけを別に集計した。
- 2、公立、私立を学校及び学年別に整理した。
- 3、質問B6に対する学生の叙述は成るべく生のままの表現を残すように心がけた。
- 4、意味不明にして要領を得ないものは除去する原則をもつて整理した。
- 5、質問B6は、答を一応羅列し、全体を検討し、その結果を飯沼氏の入信動機(9)の分類表に修正を加えたものに依つて整理した。

四、結果と考察

- 1、神仏を認知した経路。第2表に依つてみると
 - a、公立学校においては母親が断然高率を示し、特に小学及中学において、その傾向を示して居る。
 - b、父が認識の源泉であるとするものは、公、私、学年を通じて低位である。
 - c、母、父及び両親と回答したものを拾つて見ると、予想外に多く第2(a)表の如くである。このことは、宗教

第2表 神について知つた経路

内容 校種	経路																計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	
公立小学校	母	父 母	牧 師	教 師	父	おばあさん 6	おぢいさん 4	姉 2	読 書 1	友 達 1	僧 侶 1	思 い 出 せ な い 39	無 答 8				120
%	21.6	8.3	6.6	6.6	5.0	5.0	3.3	.8	.8	.8	32.5	8.3	1.6				99.4
公立中学校	母	祖 母	牧 師	父	教 師	家 人	祖 父	教 会 で	自 然 に	読 書	友 人	近 所 の 人	僧 侶	思 い 出 せ な い			1181
%	25.0	16.0	16.0	13.0	4.0	4.0	3.8	3.4	4.2	1.6	1.6	1.2	1.2	5.0			100.0
私立中学校	先 生	母	祖 母	父	家 の 人	牧 師	自 然 に	読 書	教 会	祖 父	僧 侶	友 人	思 い 出 せ な い				130
%	52.1	16.0	6.0	5.0	1.5	1.5	2.4	1.7	1.7	3.9	1.5	1.0	5.5				99.9
公立高校校	両 親	母	牧 師	自 覚	祖 父	祖 母	教 師	自 然 に	父	読 書	家 族	隣 人	僧 侶	教 会 学 校	思 い 出 せ な い	無 答	535
%	8.5	6.5	4.5	6.0	2.0	5.0	4.5	4.1	3.5	2.0	2.0	0.5	0.5	0.5	40.0	11.9	100.0
私立高校	教 師	母	祖 父 母	父	自 然 に	家 の 人	牧 師	日 曜 学 校	僧 侶	自 覚	読 書	無 答					180
%	53.3	14.0	8.0	4.0	5.0	2.2	2.0	1.8	1.7	1.1	1.1	0.7					100.0

初期宗教心の統計的研究

七

々育を進める上に極めて重要な要素であり、発見だと考えらるる。d、更に祖父母及び家の人に依るものをもとに母父両親に次ぐ宗教源をなして居る。特に、第2(a)表にみる如く、

第2(a)表 家庭経路

経路		両親	祖父母	家人	計
学校種					
公小		34.9%	8.3%	1.6%	44.8%
公中		38.0"	19.8"	4.0"	61.8"
公高		18.4"	7.0"	2.0"	27.4"
私中		21.0"	9.9"	1.5"	32.4"
私高		1.0"	8.8"	2.2"	28.2"

公立学校の青少年に対しては他の何れよりも高い供給源を示して居る。これを、両親、祖父母家人を源とする総計を見ると、公立においては、実に五〇%、私立においては三〇%の高率を見せて居る。

e、私立学校における神仏認知の源泉には「先生」が決定的で、公立学校のそれと比較すると次の如くである。

小中高	6.6%	実に、公立は私立の十分の一に相当する。これは公立機関における宗教教育が如何に低いかと云うこと
公中高	4.0"	と、同時にミッションスクールにおいて、当然のこと
公私中	4.5"	とは云え、神仏について青少年がいかにその知識
公私高	52.1"	
公私	53.3"	

f、体験を強く受けて居るかと言うことが明確にうかがえる。

「自然に」、「自覚」の答は同質と一応みて扱おうと左の如くである。

公立学校が私立学校のそれを上廻つて居ることはみのがせない現象であり、宗教生活が意識にその根柢をおくとするならば、この事実は考慮せねばならぬと考えられる。即ち、知的、理性、感覚が、成長、発達するに従つて宗教意識が内的に発芽する自然現象でもある。

g、次は牧師僧侶とする答を見よう。

小中高	4.2%	次頁の数字が示すように、校種、学年、公私の別なく牧師の方が、僧侶よりも高
公中高	10.1"	
公私中	2.4"	
公私高	6.1"	

い供給源となつて居る。このことは現代の一般少年に対し、宗教々育の傾向を示すものと考えられる。

h、「思い出せない」、又は無答の答を見ると、

牧師	6.6%	16.0%	4.5%	1.5%	2.0%	無答
小中高	6.6%	16.0%	4.5%	1.5%	2.0%	8.3%
公	6.6%	16.0%	4.5%	1.5%	2.0%	1.0%
公	6.6%	16.0%	4.5%	1.5%	2.0%	1.9%
私	6.6%	16.0%	4.5%	1.5%	2.0%	0.7%

が五・五%、高校生は皆無であるのが対照的である。この現象は宗教的環境と宗教意識の発露、高揚の度合の結果と思われる。

i、公立・私立中学校において、教会、教会学校及び日曜学校が供給源と反応されて居る。然しそれがキリスト教か仏教か、又は他の宗教の学校であるかはここで即断出来ない。然し現代日本における宗教々育機関の影響力の傾向がそのまま表れて居て面白い。

註 現在キリスト教界では日曜学校と呼称して居ない

2、神仏に関する知識をはじめ得た場所については第3表に依つてみると

a、公立学校は、その校種を問わず、家庭が最高で、教会、寺院、学校、神社の序列を示しているのに対し、ミッションスクールの場合には学校が殆ど五〇%を示し、家庭、寺院、教会、神社、墓の順になつて居ることも、供給源に照して理解出来ることである。

b、ミッションスクールの供給源として学校が高いことは家庭源が、公立のそれより低いことを意味しない。

それは明らかに学校に於ける宗教々育が強い故である。

c、「思い出せない」は、公立共各学年を通じ、二〇―二六%を示して居る。然し公立高校のみは五三%、その上に無答が一二%を示して居ることも見のがせない。

第3表 神仏の知識をはじめて得た場所

内容 校種	場 所							計
	1	2	3	4	5	6	7	
公小	家庭	教会	寺院	学校	旅行中	思い出せない		120
%	51.5	9.6	6.3	6.3	2.1	24.1		100.1
公中	家庭	神社	新社会	寺院	学校	山で	思い出せない	1181
%	35.0	13.3	11.0	6.0	6.0	2.0	26.7	100.0
私中	学校	家庭	寺院	教会	お墓	思い出せない		130
%	46.0	21.0	3.0	1.8	1.5	26.7		100.0
公高	家庭	教会	学校	神社	寺院	思い出せない	無答	535
%	18.0	11.0	3.5	2.5	1.1	52.8	12.2	100.0
私高	学校	家庭	寺院	教会	思い出せない			180
%	53.5	22.0	2.5	2.5	19.7			101.0

い現象である。

3、はじめて神仏のことを知った時の年齢については第4表を見ることにする。数字で示すように

a、はつきりした結果を示しているのは、公立・私立間の差異である、即ち私立の中学校が「中学入学後」、「中学時代」又は「高校入学後」の回答率の高いことである。

b、校種、学年、公立・私立の別なく「思い出せない」無答が高率を示して居ることも、場所の要素と共に同じ傾向にある。但し、この意識した年齢調査は、受洗、発心等の如く確定日がないので困難であることを発

第4表 はじめて神仏のことを知った年令

の 校 種	年 令											計
	5才	6才	7才	8才	10才	11才	12才	思 い 出 い	せ な い			
公 小	5才	6才	7才	8才	10才	11才	12才	思 い 出 い	せ な い			120
%	5.2	7.3	3.1	10.5	8.4	7.3	8.4	39.7				99.9
公 中	5才	6才	7才	8才	9才	10才	11才	12才	思 い 出 い	せ な い		1181
%	8.0	7.5	7.3	7.5	8.6	9.2	10.0	8.4	33.5			100.0
私 中	中学 入 後	5才	6才	10才	12才	思 い 出 い	無 答					130
%	55.0	3.5	5.0	4.0	3.8	25.0	2.7					100.0
公 高	小 時 学 代	中 時 学 代	幼 い 時	8才	11才	15才	16才	思 い 出 い	せ な い	無 答		535
%	11.0	3.8	3.5	1.0	2.0	1.0	2.0	55.6	20.1			100.0
私 高	中 学 で	高 校 入 後	幼 い 時	生 れ た 時 か ら	7才	10才	11才	13才	思 い 出 い	せ な い		180
%	35.0	7.0	13.0	2.0	8.8	10.0	9.0	3.0	11.2			100.0

教生活の経験の有無を第5表に依つてみると

a、公立では七〇%、ミッションスクールでは九八%の反応を示して居る。

b、公立小学校及中学校は七五%、七二%を示して居ることは入信に関する既往研究の結果とはほぼ一致して居ることを発見した。

c、公立中学の七二%に比し、ミッションスクールの中学生の九六、八%は意外なる発見であり、同時に極め

見した。

c、ミッションスクールの生徒学生も、中学、高校入学前は公立と同じ傾向にあったと考えられる。然し、ミッションスクール入学後、神仏について強い刺激を受けたものとみるのが、妥当である。

4、神仏について意識的に考えた、話した、願つた即ち宗

て有意なる事実である。

第5表 神について考えたか

学校学年		答			計
		有	無	無答	
公立小学校	6年生	120	31	10	161
	%	74.5	19.2	6.4	100.0
公立中学校	2年生	850	281	70	1181
	%	72.0	22.2	5.8	100.0
私立中学校	2年生	126	4	0	130
	%	96.8	3.1	0	99.9
公立高校	2年生	369	111	55	535
	%	69.0	20.7	10.3	100.0
私立高校	2年生	177	3	0	180
	%	98.3	1.7	0	100.0

d、公立では無答が六乃至一〇%を示して居るのに対し、私立では皆無であることも、宗教心の発露度を明かに示して居る。

5、神仏と学生各自の間に何等かの交渉があつた時の彼等があげた理由又は動機は前述（三節五項）の如く次の六項に分類整理された。即ち

- (1) 自己の健康の不良
- (2) 逆境に立つた時
- (3) 近親友人の死、病に会つた時
- (4) 他人の感化誘導
- (5) 自発的なるもの

第6表 神について考えた理由、動機

項目 校種 生徒数	健康不良	自己の逆	境に関するもの	近親友人の死、病	他人の感	化誘導	全く自発	的なるも	のわ	いからな	
公、小学 二二〇名	病負 二〇 % 3.1	此苦し配 れいのた たの時時 時	困つた 心配の つたの たの時 時	父叔親 、父の 母病の のの死 死			ね天勉り 気強出悪 前出る事 なる来な るよう人 ようのに 九一二二 四.....			悪事をした た時	
		六三二一 % 12.6		四二四 % 10.5				九一二二 % 16.8		47.0	
公、中学 八一八名	病け 二〇 % 8.0	悲し験 いの時 時	孤険た れなた たの時 時	危強し 険なた たの時 時	困つた 心配の つたの たの時 時	苦敗し しいの たの時 時	失わ ぬの時 時	両祖告 親父別 の母式 の死で 病五三 二..... 一七四	聖仏祭牧 書壇のの をのとき 読前話 む二一三 二一七	願思ね 望ふける 望ける 三四五 四二八	
		七六六六 % 40.3	一三三三 % 11.2	一三三三 % 11.1	二一七 % 13.4	二一七 % 16.0					
私、中学 二一三〇名	病 二〇 % 2.8	苦悩 のれ時 時	迷険ら れの時 時	怖い敗 し敗者 の時を 時目撃	自殺者 をを 目撃	両祖墓 親父の 母の死 死	宗仏先 教壇生 ののの 時前話 間	願思ね い思る 事義時 事な思			
		二一 % 61.9	一八六六 % 10.0	一八〇 % 10.3	七五二 % 15.5	二一七 % 9					
公、高校 五三三名	病 二〇 % 5.6	困心悲 つし試 たのの 時時	入信や のみ感 たの時 時	自な感 れいの たの時 時	孤わら れいの たの時 時	救つた 独りの たの時 時	台残の 風の者 たの時 時	近友病 親達人 のの訪 死死門	友教他読 と会人書 宗へのの 教行す をくすめ 語る	自自ひ 然に福ま に反なな 省時時	
		一三四四 % 41.4	一三四四 % 7.0	一三四四 % 9.2	一三四四 % 8.2	一三四四 % 28.6					
私、高校 一八〇名	病け 二二 % 5.0	困つた し安の時 時	不苦し 平ら感 のれの時 時	怖平ら つた感 たの時 時	頼配験 れたな たの時 時	災そ難 うそ難 たの時 時	祖父肉友 父の身人 母死のの の死死時 の死時間	宗法寺読 教に参書 の話を 話した 時間	人神感静 生秘謝か の感すな 無情時 感時		
		二二 % 45.2	一三三三 % 11.6	一三三三 % 26.3	一三三三 % 12.0	一三三三 % 0					

(6) 解らない、思い出せない、無答
以上の項目分類とその内容を第6表に依つてみると

a、逆境と自己の病氣・負傷に関するものが校種、学年及び公立、私立を通じて断然高率を示して居る。即ち

15.7%	48.3%	47.0%	64.7%	47.2%
小中高	中高	中高	中高	中高

上の如き数値を示して居る。これは、スターバック、プラット其の他の宗教心理学者が指摘して居る如く初期宗教心の本質を有力に裏書きして居ると云える。若し「近親、友人の死・病」の項と合せみる時、更に明瞭になる。

b、逆境の内容を吟味すると、小中学校においては公立私立を問わず、日常生活中の具体的場が、高校生より

公公	私私
----	----

鮮明にあらわれて居る。
c、「他人の感化、誘導」と「全く自発的なもの」とを対比してみると

全自発的	16.8%	13.4%	8.2%	15.5%	12.0%
化誘導感	11.1%	9.2%	10.3%	26.3%	
他人の	小中高	中高	小中高	中高	小中高

他人の感化誘導の項においてミッションスクールは公立学校より高率を示して居る。特に高等学校において。その内容を見ると、宗教の時間に神仏について本当に考えるとの反応が中学で五・一%、高校で一三%を示して居るとは宗教々育上みのがせない事である。公立中学に「聖書を読む時」と云う反応が四・二%を示して居ることは、恐らく入信者か入信家庭の子女である

と思われる。

「全く自発性による」の内容を見ると、私立は断然公立の上位にある。この事は、ミッションスクールの子女は宗教的素地が出来て居ると見て差し支えなからう。公立小学生が一六・八%と云う高率を示して居るが、その内容を研べると「ねる前に」が、九・四%で入信者のあらわれであるか、又は家庭環境とみるべき

であろう。

又、自発性を学年別にみると低学年は現実的であるのに対し、高校生は思想的、自己反省的である事が、注目される。

更に公立、私立を対照すると、ミッションスクールは中学高校とも、思想が宗教的である。例えば、中学生の「不思議な思い」又は「思想」が、五・一%、高校生にいたつては、「人生の無情感」、「感謝した時」、「神秘性を感じた時」等が一〇%以上を召めて居る。

d、「何うして神仏のことを考えたかわからない」の項をみると、ミッションスクールの皆無に対し、公立学校では上にあげた数字が示す如く高い割合をして居るのは全く対照的である。この現象は人生航路のことに想いをいたす時、はつきりした信仰を持つか持たないかと云う問題に發展するものと考えられる。

小中高	47.0%
公	16.0%
公	28.0%

6、神仏についてはじめて意識的に交渉のあつた年令は第7表で明らかである。

a、即ち校種、学年、公立、私立の別なく、一貫した傾向は年令の進むに従つて、神仏意識が上昇して居ることである。このことは、他の多くの入信年令研究の結果とはほぼ一致して居る。

b、小学、中学生は八才位から意識が上昇し居るが、ミッションスクールの高校生になると十一才位から急に上昇して居る。然るに公立高校生は中学生と殆んど同じ傾向を示して居る。

c、「思ひ出せない」の項に目を向けると

公立学校は断然高く、特に高校生にいたつては恰も当惑した如く、殆んど六〇%に達せんとして居る。

第7表 神について考えた時の年令

学校	年 令 (数え年)													計		
	年令	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16			
公小		5	6	7	8	9	10	11	12	わからぬ						120名
%		4.2	2.1	4.2	11.5	10.5	12.6	18.9	16.8	20.1						99.9
公中		5	6	8	9	10	11	12	13	思せない 出い						1181名
%		2.1	8.0	5.4	7.4	12.0	12.4	13.2	8.0	31.5						100.0
私中		幼 い 頃	7	8	9	10	11	12	13	思せない 出い						130名
%		15.1	9.0	6.4	10.5	10.0	11.0	11.0	13.0	10.0						100.0
公高		5	6	7	10	12	13	14	15	16	17	思せない 出い				535名
%		2.8	3.2	1.6	4.4	4.8	5.2	4.0	6.8	3.0	4.0	58.0				100.0
私高		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	思せない 出い		180名
%		2.0	3.0	1.6	6.0	6.0	7.0	15.0	11.0	12.0	12.4	12.1	10.9	3.0		100.0

ここでも、公立は私立校とは対照的で前述(4章5節b項2)の宗教々養又は素地の問題として考えられる。が、然し最も重要なものはミッションスクールにおける宗教々育の影響により、既に過去の宗教的経験が、呼びおこされて意識が整理され、鮮明になつて居ると推測される。

五、要 約

ここで、本稿の攻究問題に應えることにする。

1、現代の女子小学生、中学生、高校生はどんな経路で神仏を認知するか？ われわれの発見は

a、公立学校の子女は母が断然優位に立つ宗教々育者である。

その優位な母に、父、祖父母、家人を加えると、次の如く予想外に高い率を示す。このことは、数字が示すよ

うに、ミッシェンスクールにおいても看過出来ない重要な事実である。従来

の多くの入信者を対象とする研究結果と大体一致した結果であり、青少年の宗教々育に於ける家族員、特に母の占むる重要性を再認識せざるを得ない。

b、私立即ち浄土教典を土台とするS女子学園においては、「先生」が中学、高校においても各々五二・一%、五三・三%と云う驚く可き高率を示して居

る。然るに、公立学校においては、小学校は六・六%、中学校は四・〇%高校は四・五%を示したにすぎない。この事実、公立学校における宗教々育は普遍的、抽象的のはんちうを出られないにせよ、甚だ低位であることを如実に物語つて居る。

c、職業的宗教々育者に対する反応は、校種、学年、公立、私立を問わず、僧侶よりは牧師の方が、限られた調査対象の青少年に限る限り、しげく接触して居るとき結果を示して居る。

d、「思い出せない」の返答は公立には四〇―五〇%もあるのに対し、私立では皆無とも云うべき顕著なる差異を示して居る。これは宗教心又は宗教意識の発露の度合と見るのが妥当だと思ふ。

2、神仏に対する知識を得た場所については

公立学校は 家庭が断然高く、教会、寺院、学校、神社、私立学校は 学校が断然高く、家庭、寺院、教会、神社、墓の序列を示した。

3、はじめて神仏を認知した時の年齢については、調査前の予記に反し、調査は甚だ困難であり、被験者を苦しめた。然し私立学校の「中学入学後、高校入学後」との反応が半数近くの高率であつた事は意外なる発見であつた。

4、神仏について意識的に交渉があつた、又は考えた体験の有無については

公立学校は 七〇% 私立学校は 九八% である事を発見した。

第8表 神仏意識の動機

順序	理由	1	2	3	4	
種校		病気に立って、逆境	全く自発的に基いて	近親・友人の死・病	感化誘導によつて	わからぬ
公小		15.7	16.8	10.5	—	47.0
公中		48.3	13.4	11.2	11.1	16.0
公高		47.0	8.2	7.0	9.2	28.6
私中		64.8	15.5	10.0	10.3	0
私高		50.2	12.0	11.6	26.3	0
総計		226	65.9	50.3	46.9	91.6
平均		45.2	13.2	10.1	9.4	30.5 公立のみ

5、神仏について考えた理由、動機は次の如く要約出来た。百分比で示せば第8表であきらかな如く、ここに宗教心の本質が短的にあらわれて居る。この結果は入信動機に関するスターバック以後の多くの近年の研究の結果と一致した結果となつて居ることを発見した。

6、神仏についてははじめて意識的に関係をもつた時の

年令については、校種、年令、公立、私立を通じて云えることは、年令の進むにつれて、神に対する意識、態度が高揚して居ると云うことである。この発見も、他の多くの入信年令研究の結果とはば合致して居る。

本研究は、女子青少年が、信仰生活に入る決心をする以前の、宗教心の発芽経路及状態を究明しようと意図したものであるが、その得た結果を見ると、入信の研究の結果と接近したものであることを発見した。然し乍ら、現代の一般女子青年の宗教心の度合、ミッシェンスクールの女子との対比については予期以上の収益であった。

参 考 文 献

- 註(1) McDougall, W. : Introduction to social Psychology 15th ed. p. 302
(2) Pratt, B. : Religious Consciousness ph. 02-3
(3) Pratt, B. : Ibid ②
(4) Starbuck, E. D. : Psychology of Religion 1927 pp. 199-205
(5) 今田 恵 宗教心理学 一五九頁
(6) この点に關しては Coe, G. A. : Spiritual Life pp. 30-46 に詳報してある。
(7) この点については前掲今田氏の「一五九—一六二頁を見られるとよく解る」。
(8) 評価基準は本誌第五卷第一号一七頁を見られ度い。
(9) 飯沼龍造 現代日本の信仰 一一三頁

(本学教授 教育学)